

Kindai Hospital Today

金沢大学病院ニュース

第6号
2004

平成16年9月30日発行 金沢大学医学部附属病院 〒920-8641 金沢市宝町13-1 TEL 076-265-2000



病院長 小泉 晶一



病院長 抱負を語る

履歴

昭和42年	金沢大学医学部卒業	平成5年	金沢大学医学部助教授
昭和47年	金沢大学大学院医学研究科修了(小児科)	平成8年	金沢大学医学部教授(小児科)
昭和47年	金沢大学医学部附属病院助手	平成16年4月	金沢大学医学部附属病院長、現在に至る
昭和53年	金沢大学医学部附属病院講師		

1 基本姿勢

前例に捕われずに、常に頭をやわらかくして、世間の常識から乖離しない病院運営を心がけます。社会のニーズに敏感でありたいと思います。いま一つ大事なキーワードは、スピードです。社会の昨今の動きは非常に速い。それに病院も付いていかねばなりません。問題を先送りしないで、実行しながら考えます。

2 財政改革

国立大学法人化は突き詰めれば財政改革だと思います。大学病院の財政基盤の見直しです。各部署でコスト意識を持ち、収入と支出を明らかにしましょう。

3 安全管理

医療ミスは病院の致命傷になります。火の用心。院内感染予防対策。安全管理や緊急連絡のための職員全員の電子メールリストを整備します。

4 病院評価

病院機能評価をパスすることが本年度のまず第一の目標です。

5 「ブランド」の創成

いまや大学は学生に選ばれる時代です。病院は患者様に選ばれる時代です。とすると、選択される側には「ブランド」性の高い商品が準備されていなければなりません。診療科横断的研究治療センターとして、下記のようなセンターを計画し、治療研究プロジェクトを推進させます。

●肝臓センター ●北陸ハートセンター ●炎症性腸疾患センター ●痴呆・脳卒中予防治療センター…などなど。

6 特定機能病院

特定機能病院として、高度先進医療を推進し、基礎研究と一体となって、トランスレイショナルな研究的治療も試みる必要があります。病院を「臨床医学治療研究センター」と位置付けたいと思います。

7 地域連携

地域連携無くして、金沢大学病院は存在しえません。地域を支援する中核病院としての役割分担が大切です。

8 医学教育研修センター

新臨床研修制度が発足しました。大学病院を「臨床医学治療研究センター」とともに、「医学教育研修センター」と位置付けたいと思います。

9 仕事の内容の見直しと待遇改善

法人化でも人員増は至難です。簡略化できるところは簡略化し、そして働く意欲の出る労務システムを考えます。

10 病院モニター

病院モニターを公募して市民の声を聞きます。利用者からの不満、苦情、要望を聞き、そのニーズに真摯に取り組むことで、大学病院のブランド性が高まるのです。

11 リクレーション

患者様向け、職員向けのリクレーション専門部署があるといいですね。とにかくみんなが働きやすい、働く意欲の出る病院にしたいと思っています。

本院の「基本理念」、「基本方針」及び「患者さまの権利」

基本理念

最高の医療を提供するとともに、人間性ゆたかな優れた医療人の育成に努める

基本方針

- 人間性を重視した質の高い医療の提供
- 将来の医療を担う医療従事者の育成
- 臨床医学発展のための研究開発
- 地域医療への貢献

患者さまの権利

- 患者さまの意志が尊重された公平で良質な医療を受けることができます
- プライバシーが保護され、個人情報 は厳重に保護されます
- 診療内容について十分な説明を受け、自ら選択することができます
- 臨床研究に参加することができます
また、臨床研究に参加を求められても拒否することができます
- 患者さま自身の診療録(カルテ)の開示を求めることができます



理事 渡邊 洋宇

病院担当理事就任にあたって



本学は4月から国立大学法人金沢大学となり機構が大きく変わりました。この度、私は林学長のご指名により理事・副学長を拝命致し、4年振りに大学に戻ってきました。病院担当理事として病院経営室および病院企画会議を発足させました。私の病院長在任中に始まった病院の再開発も、いまだその途上にあります。またこの度の機構改革に伴い、今後の中央診療棟、外来診療棟の再開発、大型機器整備には債務償還が必要となります。

病院経営には、今後、運営費交付金の減額の方、経営改善係数が課せられます。このためには、収入増の方、支出の減少を図ることにより、収支の改善を行う必要があります。その目的のため病院長を委員長とし、各種の委員会が立ち上げられております。

近年の医療制度の変革に伴い、大学病院でも在院日数の短縮、包括請求の導入がなされ、短期間で患者を回転させ病床の有効利用を図ることが求められます。これには病診ならびに病病連携の一層の強化が不可欠といえます。本院の年間収入

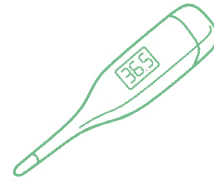
は約160億円であります。総病床数は832床ですから、1ベッドあたり年間では約2千万円の収入ということになります。仮に10床が1年間空床のままですと2億円、100床では20億円の収入減となります(ちなみに5月の病床利用率は80%でした)。最近再開発したいいくつかの大学病院では、医療制度の変革に対応する経営改善策として、100床内外の削減(これに伴う職員の減員)を行っております。しかし本院は当面は現有病床数を維持するよう努力することとしました。この他、法人化に伴い、医師を含め医療従事者の週40時間勤務を労働基準局から指導されており、早急な対応に迫られております。

多くの課題を抱えながら法人化が進行しております。この荒波を乗り越えるには、今こそ職員全員の意識改革が必要であります。

“病院があなたに対して何が出来るかを求めるのではなく、あなたが病院に対して何が出来るかを求めよ”

院内各部門全員の皆様の叡智により、この変革は必ず乗り切れるものと信じます。

副病院長就任あいさつ



4月から小泉新病院長のもとで経営企画担当副院長を命ぜられました。これまで診療・教育・研究が本分と考えひたすら邁進してきましたので、こうした点には疎く適任ではありませんが、小泉院長を事務的にサポートするということでお引き受けしました。関係各位の御指導を頂きながら、これまでの医師あるいは教員としての経験を生かし、病院が良い方向に向かうような助言ができればと思っています。独立法人化と新臨床研修制度という大きな変革の初年度に当たるわけですが、同時に多くの積年の問題点（医療の安全性や財政難など）も噴出しています。会議でこれらの問題が討議されるたびに暗澹たる気持ちになります。

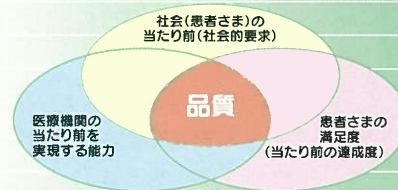
副病院長 松井 修
(病院経営改善担当)

～高品質の医療の提供に努力いたします～

小泉病院長から「安全対策担当の副院長をたのむ。」と言われた時には、薬剤部長が副院長を務めることは極めて異例なためかなり戸惑いました。しかし、医薬品は医療に不可欠であり、医薬品に関わる医療ミスや事故も多いことから、医薬品管理の責任者として、また、薬物療法の監督者として、医療安全に対しては相応の責を果たさなければならない。また、医師以外の立場から病院運営に何かお役に立てるかも知れないと思い、副院長をお引き受けすることにしました。松井、渡邊両副院長と力を合わせて小泉病院長を補佐して金沢大学病院での「高品質の医療の提供」に努力していく所存であります。

さて、「高品質の医療」とはどういう医療でしょうか？「最先端で高度な医療」のことでしょうか？本院は大学病院ですから高度先進医療を行うのは当たり前です。高度な医療と高品質の医療は全く違う意味なのです。図に示しますように、「患者さまの

当たり前」と「病院が当たり前を実現する能力」、そして「患者さまの満足度」が重なった所が「医療の質」とされています。したがって、これらの3つの輪が完全に重なった時「高品質な医療」が提供されたことになるのです。医療ミスを起こさない努力は基より、今年は病院機能評価機構による外部評価も受審することになっており、病院を挙げて「患者さまの満足度を上げ、医療の当たり前を実現する能力を高める努力」をしていかなければなりません。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。



副病院長 宮本 謙一
(安全管理対策担当)

私は、病院改革をして新たな活力を病院に吹き込みたいという小泉院長の熱意にふれ副院長をお引き受けいたしました。歴史と伝統のある金沢大学病院を、時代に取り残された地方の一大学病院にしないよう力を発揮することが出来ればと思ったからです。

4月の独立法人化の導入とともに、医師、看護師、技師、事務職員の中ににわかに病院収支に対する関心が高まったことと思います。一般病院ですでに原価計算が行われていて、不採算部門は縮小を余儀なくされ、病院の「勝ち組と負け組」がはっきり分かれてきています。今までの体制での大学医師（教員）による病院経営は「武士の商い」の様なもので決してうまくいく訳はなく、かつて多くの国立大学病院は大きな赤字を補填してもらいながらやっと生きてきた状況でした。今後国立大学病院はさらに研究教育といった本来の職務をまっとうした上での経営努力が試されているわけです。管理者としての理事、院長など経

営努力がはっきりとした数字となって現れてきますのでその責任はとても大きくなるでしょう。

しかしその経営努力の原動力は、現場で働いている我々職員です。一般病院なみの収益を確保しその余剰や民間との共同研究などの外部資金を導入し研究や機器整備に充てるといった手法をとれないと「科学する優秀な臨床医集団」としての大学病院の本来の責務を果たすことが出来なくなるわけです。また職員間の労働条件に格差の大きい従来の体制のまま、見た目の改革やアドバルーンを上げて「ただ働け働け」というだけでは職員のやる気はでてくる訳はありません。職員間の温度差を減らし皆が働きやすい環境を整え、各々インセンティブをあたえる事が出来れば職員は喜んで大学のために働く事と信じています。そのような側面からも院長を支援してがんばって行くのが私の使命です。

副病院長 渡邊 剛
(診療・臨床教育・臨床研究担当)

～国立大学法人金沢大学～



病院部長 小鍛治 和夫

法人化は、予算、組織、人事など様々な面で規制が大幅に緩和され、大学の裁量が拡大するといった法人化のメリットを大学改革のために最大限活用するところに意義があると思われます。

そのためには大学の自主性、自律性を尊重するとともに、国民や社会への説明責任の重視と競争原理の導入、経営責任の明確化による機動的・戦略的な大学運営の実現を求められています。

これらを実現するために、金沢大学は学長を中心とする機動的な運営体制の確立、学外者の参画による社会に開かれた運営システムの実現、つまり学長の強いリーダーシップのもと役員会の議決により透明性の高い適正な意思決定を行っていくための組織が確立されました。

本院でも法人化にともなって経営の自律が求められています。今年度から支出(債務償還及び一般診療費)と病院収入の差額で収入に不足が生じた場合、国から運営交付金が交付されますが、毎年経営改善係数として16年度収入予定額の2%が減額され、予定では19年度から交付金は0となります。このように財政的に厳しい中にあっても、社会や国民の期待に応え、高度医療を提供していくためには、病院長のリーダーシップのもと、全職員が一丸となって病院運営・経営に携わっていくことを期待しています。



看護部長 和田出 静子

…病院機能評価の受審に向けて…

4月から、「国立大学法人金沢大学(医学部附属病院)」となって、それぞれの頭の中には戸惑いながらも、また温度差はあっても何かを「変え」「改善」しなければという思いがある一方、勤務体制など厳しい現実に「元気が出ない」ということも事実と思います。

しかし、この大転換のときだからこそ変わるチャンスととらえ前向きに取り組むことが必要なのではないかと考えます。大学病院としての使命があり、看護部としても第一に「質の高い医療・看護の提供」を理念として掲げていますが、これからは、その質の高い医療・看護の指標づくりが必要だと思います。その一つが今年の目標である機能評価の認定を受けることと私は位置づけています。機能評価は認定されればそれで終わりということではなく、「改善」の始まりであると思っています。

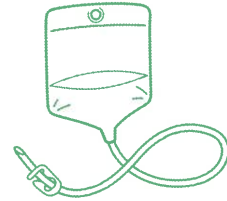
先ずは病院職員全員が共通認識をもって、あと3ヶ月間どんな準備ができるかにかかっています。看護部では1年前から少しずつ準備を進めて来ましたが、いま、あらためて見てみるとあれもこれも必要という状況で、日々全開でとりくんでいます。看護部は、病院の中で最も人数の多い部門ですから、その影響も大きいことをいつも意識しながら、いま、何が重要かを見極めることが大切と考えています。

そして、いろいろな「改善」のためには、ひとりひとりのモチベーションを高め、それを維持していくことが大事ですし、そのため
の環境整備が必要です。大学の中で、こんなに様々な職種・資格者がいて、しかも24時間、連携をとらないと成り立たないのが病
院ですから、もっとご理解も得ながら対策が必要と思っています。当然、「経営」感覚も必要ですし無駄も省かなければなりません。

いまこそ、患者様のニーズを掘り下げ、患者本位の病院への変革を目指す時と考え、努力を重ねていきたいと思っています。



新病棟中央診療棟 病院長視察



視察中の医院長ら

新中央診療棟の建設工事は順調に進んでおり、今年の12月末完成の予定となっております。

4月28日(水)小泉病院長、渡邊手術部長、山本麻酔部長他数名で工事中の中央診療棟を視察しました。午前9時に工事現場事務所に集合、全員工事用ヘルメットを着用し、小雨の降

る中建設現場へ直行しました。まだエレベータが設置されていないため、建設工事用の仮設昇降機で4階まで上がり、4階の手術部を中心に約1時間視察を行ないました。

4階フロア約3,500m²には、14の手術室、スタッフ室、患者乗替ホール等が配置され、現在の手術部より広がっております。また、手術部専用階段で3階とつながっており、カンファレンスルーム、ラウンジ、更衣室、当直室等の居室が配置されています。

視察の時期が少し早かったため、ドア、天井、壁、床等は未仕上げの状態であったが、平面図を見ながら随行の工事担当者から概要説明を受け各室の位置確認や質問を行ないました。平成17年1月には建物が引渡しとなり、建物の維持管理及び移転に向けての準備作業に着手しなければなりません。中央診療棟は、大型で高額な設備が多く、更新・移設に伴う契約手続き業務に相当の時間と労力を要しますが、平成17年10月の開院を目標に移転準備を進めますので、みなさんのご協力をお願いします。

病院企画課課長補佐 青木 学

事務部課長 紹介



総務管理課長 瀧田 豊文

「他人に優しく」がモットーなのですが、知らず知らずに傷つけていることがあるかも知れません。今は、病院機能評価受審に向けて燃えているところです。(皆さん一緒に頑張りましょう。)

生れは岐阜県郡上市大和町の「古今伝授の里」です。(インターネットで「古今伝授の里」をクリックして下さい。)

昭和43年に名大病院に入職し、足掛け25年名大病院にいましたが、総務の経験は今回が初めてです。1月に金大に来て法人化を経験し、一時はどうなることかと思いました。余り解決していることはありませんが、徐々に改善していければと思っています。

これまでの職場で一番の思い出は高松高専での八十八箇所巡りと、乗鞍青年の家での通勤の厳しさ(10社の坂道を1000m登るので、タイヤは6ヶ月でツルツルになり、冬は氷の坂道を滑り降ります。)で、大自然の美しさを経験できたことです。それ以来、野外活動が好きになり、ゴルフも覚えたのですが、金沢ではまだやっていません。通勤は30分歩いて通っています。私の健康法です。

事務部課長 紹介



病院企画課長 牧野 忠志

病院が国立大学法人化となって

2年ぶりに戻った金沢はやはり加賀百万石という歴史と文化都市であることを痛感します。そのうえ食(魚)、お酒が美味しいので私にとっては本当に嬉しいかぎりです。

本院の病院再開発整備は、中央診療棟が今年12月に完成、残すは外来診療棟だけとなり、病院にとっては病院経営の健全化と同様に外来診療棟建設に向け全力投球しなくてはならないこととなります。

さて、法人化となり5ヶ月目に突入しましたが病院や職員に求めていることは「自主・自立」ということではないでしょうか。国立大学病院は、以前から病院経営改革・マネージメント改革と言った言葉が頻繁に使われてきましたが、私自身も含め病院経営・マネージメントという言葉の重要性を本当に実感しているだろうか。

国立大学法人の病院は、自らが目標・計画を立案したものを実行し、第三者評価を受けることになります。これは、上意下達といった受動的な意志決定ではなく病院が自己責任として目標・計画を立案し、その計画を達成しなくてはならないことです。

以前の国立大学病院は、護送船団方式という庇護のもと病院収入が目標値に到達しなかった場合や医療費(診療費)が予算を超過した場合は、文部科学省に対して事情説明し対応措置が図られてきたわけですが。これからは、自己責任において病院経営を行うことになり、このため企業会計の知識に卓越した人材を求め、病院の経営分析や経営改善を行い外部に対して積極的に説明していく必要があります。

法人化となった病院は、病院経営を限られた資源の中で目標・計画に基づき効率的に行うこととなります。

不幸にして医療事故が発生した場合、法人自らが被告となり、原告と争うことになり、敗訴となれば多額の損害賠償の責を法人自らが負うこととなります。このことは、経営上の問題としてリスク管理が病院にとって重要課題の一つであります。

病院事務職員について多少述べたいと思います。ドクター・コメディカルスタッフは専門性の高い職種であることを理解しているが、事務系職員は「定員」というポストに安住し、「専門性」を深め、高める努力がなされてこなかったと思えてなりません。法人化では、専門性の高い職種や高度な専門知識を必要とする職種はアウトソーシングや民間企業からの採用等を大いに活用することも病院経営上重要なことではないかと思っております。

このことは、自らが専門性を高め、自己の存在価値を高めなくては、安定した職を確保できなくなることにほかならないこととなります。「課長はどうなんだ。」という声を耳にしますが、自戒の言葉でもあり反省しなくてはならないと思っております。

法人化が病院に求めることは、自主的かつ自律的に病院を経営することにほかならないと思います。全ての病院職員が国立大学法人での病院の役割と位置付けを理解し、職員の一人一人が置かれている立場において、意識改革等に最善の努力をしていくことが、病院の発展の原動力であると思っております。



医事課長 引字 勝美

平成15年10月に医事課長として着任しました。これまでの経歴は、富山医科薬科大学を振り出しに名古屋大学・核融合科学研究所・国立乗鞍青年の家・和歌山工業高等専門学校などそれぞれ個性的な職場を経験してきました。病院の経験は、20代の頃外来・医療事務電算化・用度掛等約9年間従事したことがあります。今回は15年ぶりの病院勤務となります。病院勤務の内示を受けたとき、これまでの経験で窓口業務・レセプト業務等現場の業務内容は理解できるものの「はて、「医事課長」はどんな仕事をしていただろう・・・？」という疑問が浮かびました。イメージとしては「のんびり」という記憶がありましたが、実際に引継を受け着任してみると現実は大違い。「医療安全」を始め「地域連携医療」など医事課の守備範囲が大きく広がり隔世の感にとまどいを覚え「こんなにハードな仕事だったのか」と改めて責任の重さを痛感しました。併せて今年度からの国立大学法人化、これらの波に巻き込まれないようしっかりと方向を見極めていきたいと思っております。

今回のテーマは「事務部課長紹介」と言うことなので、簡単に自己紹介させていただきます。出身は、岐阜県(南東部で長野県に近いところ)で金沢は3カ所目の単身赴任です。趣味・特技は、スキー・テニス・魚釣り・機械いじり・料理・書道 etc・・・(多すぎて書ききれません・・・) 性格的には・・・大雑把でマイペース、他人に対しては気が長い、裏表なさ過ぎ、世渡り下手、執念深い、用心深い、基本的には人付き合いが大好き、良くも悪くも正直すぎるかと思う・・・。

以上のことをご理解の上、よろしくおつきあい下さい。

外科 広報記事

『週刊現代』5月号「2004年版 心臓病に克つ『信頼の名医』」に心肺・総合外科渡邊 剛 教授が掲載されました。

記事の内容は、患者数が前年比1万人以上も増加した心臓病に関するもの。特に40代以降に多発する狭心症や心筋梗塞は、糖尿病などの生活習慣病と加齢が大きな引き金となり増加の一途をたどっているそうです。その中で、渡邊教授は以下のように紹介されています。

以下、記事抜粋

『彼は心臓手術の天才だ』と一目置かれるのが前出・渡邊金沢大学教授だ。東京都出身、45歳。00年9月、41歳の若さで母校金沢大学の心肺・総合外科主任教授となった。この世界において、ずば抜けた才能と技術が内外で高く評価されている。しかし、この天才外科医の素顔を紹介する前に、まずは、ある熟年男性の驚くべき体験から語っておかねばならない。』

そこに山形県在住の男性が心臓発作で倒れ、自ら病気に関して調べ、また自分で「手術の成功率が高く安全な病院」を日本中から探し出し、その結果渡邊教授の手術を受けることとなり、その手術が無事終了するまでの一通りが書かれています。その男性が受けたのは渡邊教授が得意とする「アウェイク（覚醒）バイパス手術」。全身麻酔をかけられない患者さんを手術する際におこなう局所麻酔による手術を指すもので、「からだに優しい心臓手術」として非常に大きな注目を集めています。この手術は渡邊教授が自ら考案した、世界に1台の心臓手術装置「完全内視鏡下バイパス手術装置」を使って行なわれ、



最近1年間では91歳の男性の患者さんを最高齢として50代から80代までの心筋梗塞や狭心症の患者さん31人がこの手術を受けています。

長所として、回復が早く患者さんの負担が小さいこと、入院期間が短縮できること、治療費を抑制できることなど多くの利点があげられ、手術、渡邊教授とともどもこれまでも多くの新聞や雑誌でとりあげられています。

『AERA』2003年6月23日号「症状ごとに、身体の部位ごとに『名医80リスト』」にも同じく、心肺・総合外科の渡邊剛教授が名医の1人として掲載されました。

心臓部門で次のように紹介されています。『今年45歳。人工心肺装置を使わず、心臓を動かしたままの心臓手術（心拍動下冠動脈バイパス術）を得意とする。現在、すべての患者が同手術の適応対象になる。』

なお、これらの記事は心肺・総合外科の外来受付横と西病棟6階スタッフステーション前のパンフレットスタンドにありますので、興味のある方は是非そのほかの記事も合わせてご覧ください。



泌尿器科 広報記事

1. 「女性のための泌尿器科外来」開設！

平成16年6月より、女性のための泌尿器科外来を開設いたしました。40歳以上の女性の約40%以上に何らかの尿失禁が認められ、その約6割は加齢、出産、骨盤内手術などを契機とした、せき、くしゃみなど過度の腹圧により生じる腹圧性尿失禁です。腹圧性尿失禁を有する女性は約800万人いると推定されています。しかし、失禁があるのに医師の診察を受けたことがあるのは9%とされています。泌尿器科は一部では男性の科というイメージや、病院へ行くのは恥ずかしいという考えが原因のひとつかもしれません。

金沢大学医学部附属病院泌尿器科では以前より、性器脱や



診察日

毎週火曜日、午後2時より
(完全予約制)
問い合わせ 泌尿器科外来まで

尿失禁の手術を多数行うなど、女性泌尿器科診療に力を入れてきましたが、今回一般外来

と診察時間を別にして、女性のプライバシーに配慮した女性のための泌尿器科外来を始めました。これにより、これまで泌尿器科を受診することをためらっておられた皆様の受診を期待しています。また失禁にかぎらず、女性に多いと言われる性器脱、間質性膀胱炎、尿路感染症、慢性骨盤痛症候群などの治療にも力を入れています。

この話題は5月18日北陸朝日テレビ「健康の館」で約10分間放映され、北国新聞でも取り上げられ、この分野の診療のニーズが高いことがうかがわれました。

2. PADAM(男性更年期障害)診療ガイドライン作成へ!

マスコミ等でも話題の疾患「男性更年期障害」の診断、治療のガイドライン作成が、日本泌尿器科学会で決まり、4月10日に1回目のワーキンググループ(班長 並木幹夫教授)の会議が開催されました。その際、男性更年期障害を広く捉えるため、PADAM(partial androgen decline of aging male)という概念の導入も議論されました。最終的なガイドラインの作成は、今年度末になる見込みです。なお、PADAM(男性更年期障害)は5月25日テレビ金沢「じゃんけんぽん」の中のからだの常識で約10分間取り上げられました。PADAMという言葉がマスコミに登場したのは、初めてかもしれません。

3. 第17回老年泌尿器科学会 盛会に終わる!

第17回老年泌尿器科学会(会長 並木幹夫教授)が5月28日、29日に金沢市文化ホールで開催されました。この学会は高齢化がかかえる排尿障害等の諸問題を医師、看護師、保健婦などが学会でとり扱い、今回のテーマは「戦争を知らない世代の高齢化を考える」でした。市民公開講座も催され、北国新聞、北陸中日新聞でも取り上げられました。会員懇親会では新宿の歌声喫茶「ともしび」の出前公演がありましたが、和田出看護部長をはじめ師長軍団にも会を盛り上げていただきました。

なお、この学会で西3階病棟看護師丸谷晃子さんが、学会賞を受賞されました。泌尿器科での看護師と医師の連携の成果で、今後も患者様に良い医療を提供するための連携が期待されます。



美声で会を盛り上げる和田出看護部長と師長軍団

歯科 広報記事

「歯の健康に関する番組でテレビに集中出演」

歯科口腔外科 山本悦秀

今春4月初旬～6月初旬の歯の衛生週間の間にテレビ出演が異例に集中しました。一般市民の方々が歯科のこういったことに関心を持っておられるかが分かりますので紹介します。

それらの内容は

- ①「歯ぎしりの成因と対策」
4月5日(月)NHK石川ワイド610
- ②「虫歯における再石灰化」
「ヒトが立つことによって発生した顎関節症」
4月13日(火)テレビ金沢じゃんけんぽん
- ③「よく噛むことの効用、特に脳刺激」
4月27日(火)テレビ金沢じゃんけんぽん
- ④「ドライマウスの成因と対策」
6月7日(月)NHK石川ワイド610
- ⑤「女性に増えている“ドライマウス”対策」
8月24日(火)テレビ金沢じゃんけんぽん
- ⑥「親知らずは、常に抜歯の対象か？」
9月6日(月)NHK石川ワイド610

.....の6回でした。

一般市民の方々にどうしたらよく理解いただけるかに腐心し、多くのフリップを作りました。4月13日の生出演で視聴者の質問に答える場面がありましたが、話の流れで思わぬ展開になることがわかり良い経験になりました。ちなみにその話題となった用語は聞き慣れない「歯固め」でした。



テレビ金沢「じゃんけんぽん」に出演する山本教授(右)

看護部

広報記事

●看護フォーラムとふれあい看護週間

2004年「看護の日・看護週間」中央行事として5月8日(土)、金沢市観光会館で、県内外から約2000名の一般の方、看護学生が集い、看護フォーラムが開催されました。トークセッション「石川の若い看護師からのメッセージ」のパネリストとして、当院の金川智子さん(西病棟6階)が登壇しました。患者様の看護をじっくりと振り返ることで、当たり前のことの大切さに気づかされた体験が発表されました。

また、「ふれあい看護週間」として同時に開催された1日看護師体験、および、親子で体験には、新聞記者を含む3名の方と、1組の親子が参加され、看護への関心を深められました。5月11日(火)には、患者サービス向上委員会と合同で病院職員による「ふれあいコンサート」を行い、フルートの音色やアカペラの合唱、ダンス、合奏を披露しました。入院患者様やご家族の皆様、約170名が集い、一所懸命練習した曲や踊りに心こもる拍手を送っていただきました。最後には会場全体で、故郷を合唱し、胸が一杯になりました。アンケートをとおして、患者様からあたたかい感想をたくさん頂きました。



パネリストとして発表中の金川氏

●百万石祭り



6月12日(土)、百万石祭りのパレードに、看護師有志27名が参加しました。金沢大学からは、病院看護部とチアリーダーやJMCの学生の参加でした。利家公やお松の方のおられる市中の目抜き通りを、「バリアフリーホスピタル 心の通った看護を求めて」をキャッチフレーズに、沿道からの声援に笑顔でこたえながら行進しました。ナイチンゲールや病院完成模型、エンジェルに扮したユニフォーム姿は、子どもたちの歓声と注目の的でした。

●テレビ出演(NHK)「ほっとブレイク 生き方美人」



ゲスト出演後若林アナウンサーと記念撮影する米嶋氏(右)

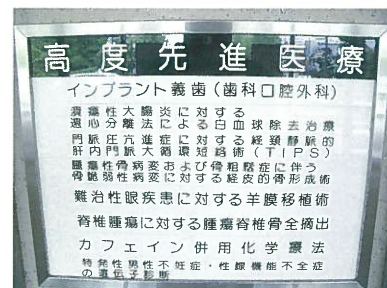
4月12日(月)17時からの生番組に米嶋美晴さん(東病棟5階)がゲスト出演しました。アナウンサーのインタビューに応えながら、看護で取り組んでいる患者様とともに立案する看護計画のことや趣味の茶道にいきいきと頑張っている様子が放映されました。アナウンサーから「患者さんにとって分かりやすい医療の提供につながり、看護師が相談に乗ってくれることで安心しますね。」とコメントがあり、また、放送後患者様から「見たよ、よかったよ。」と声をかけられ、とてもうれしい反響がありました。

整形外科

広報記事

二つの独創的治療が高度先進医療に認定！

整形外科が多大な研究を積み重ねて独自に開発した「脊椎腫瘍全摘出術」と「骨軟部腫瘍に対するカフェイン併用化学療法」が、昨年厚生労働省から高度先進医療として認定されました。今後多くの患者さんに対して恩恵をもたらすことができると考えます。



● 脊椎腫瘍全摘出術

これまで、脊椎腫瘍といえば「不治の病」、「諦めの境地」という言葉がぴったりと当てはまる領域でした。何故なら、どれだけ頑張っても腫瘍の根治的切除ができなかったからです。脊椎の中心部には脊柱管があり、その中には首から下の運動と知覚を支配する大事な脊髄が入っています。この脊髄の機能を温存しながら腫瘍根治的切除を行うことは脊椎・脊髄外科医の長年の夢でした。この聖域に誰が最初に足を踏み入れるか？ 富田勝郎教授は根治的脊椎腫瘍切除術の概念を確立し、特殊な手術機器の開発とともにその手術を可能にしました。それが「脊椎腫瘍全摘出術」です。骨肉腫などの原発性脊椎腫瘍のほか、近年増加の一途を辿っています転移性脊椎腫瘍の患者が、北陸はもちろんのこと全国各地及び海外からやってきました。生存率の向上に加えて、患者のQOLの維持及び改善に大いに貢献しています。海外の病院からの手術要請を受けて出かけることもしばしばです。また、最近の止血方法や脊髄血流の研究により、本手術の安全性はさらに高まっています。

● カフェイン併用化学療法

カフェイン化学療法は、癌化学療法の効果をより一層増強するために開発されました。癌細胞は抗癌剤でDNAに損傷を受けてもそのほとんどを修復してしまいます。コーヒーの成分としても知られるカフェインは、DNA修復を阻害することにより抗癌剤の効果を著明に増強します。現在、かつて悲劇の主人公の病であった骨肉腫の5年生存率は90%以上にまで向上しました。局所効果も高いことから、手術法も大きく変わり、切断術はもはや過去の遺物であり侵されたあしを元に戻すという患肢温存手術が主流となっています。

これら二つの治療は国際的にも高い評価を受け、数々の賞を受賞しています。本治療に興味があり、もう少し詳しい内容を知りたい方は、高度先進医療を紹介した冊子がありますので、ご参照いただければ幸いです。

表彰・受賞 状況



産学官連携功労者表彰 (文部科学大臣賞)

所属：消化器内科
受賞日：平成16年6月20日

金子 周一

日本医学放射線学会 優秀論文賞

所属：放射線科 受賞日：平成16年4月9日

南 麻紀子

第27回石川テレビ賞

所属：歯科口腔外科 受賞日：平成16年5月28日

山本 悦秀

日本放射線技術学会 第60回日本放射線技術学会総会・学術大会 学術展示賞金賞

所属：放射線部 受賞日：平成16年4月8日

木津 寛人

日本放射線技術学会 第60回日本放射線技術学会総会・学術大会 学術展示賞銀賞

所属：放射線部 受賞日：平成16年4月8日

林 則夫

石川県放射線技師会会長賞(二十年勤続表彰)

所属：放射線部 受賞日：平成16年5月30日

上田 伸一

医用画像情報学会 内田論文賞

所属：放射線部 受賞日：平成16年6月5日

松井 武司

石川県病院協会 研究奨励賞

所属：看護部(西病棟3階) 受賞日：平成16年5月29日

竹内 弘美

老年泌尿器科学会賞 コメディカル部門

所属：看護部(西病棟3階) 受賞日：平成16年5月29日

丸谷 晃子

研修医インタビュー



一週間はあっという間に過ぎます。



ばたばたと動き回りつつ過ぎていく時間の中で日々少しずつ知識と技術が培われている・・・ようで実際は研修医になったばかりの当初と何ほども変わりません。唯一変わったといえば毎日のフットワークで脚力がついたことだと思います。情けないことに大した仕事をこなしているわけでもないのにちょっとくたびれているこの頃です。金沢の土地柄と当院のシステム、研修医の生活時間に慣れたのが進歩といえます。

つい最近まで学生でのほほんとしていたのが信じられないくらい無為に過ごす時間はなくなりました。こうやって先生方は学び動いて医師として経験を積んできたのだからすごいわけだなあと今更ながら感心する日々です。一方、自分が何年か修行を積んだ先にはそれなりの医師になっているのが非常に不安です。まだ始まったばかりとはいえあっという間に研修期間は過ぎそうですから。注射する度毎にその出来具合に一喜一憂しているような小心では困るなあと思います。早く慣れて諸々の作業が手際よくできるようになりたいですがなかなか悶々としてしまいます。日々忙しい中淡々と仕事をこなす先生方や看護師の方々にいつかになれるようにがんばりたいと思います。

卒後臨床研修センター 戸澤 聡美
(愛媛大学卒)

研修医になって



6月に入り、金沢大学医学部附属病院での研修も早2ヶ月を過ぎようとしています。日々の慌ただしさの中で、国家試験合格の通知を受け取ってからあっという間に月日が流れているような気がします。

現在、私は旧第2内科にて研修を行っています。病棟業務や外来処置、直当での救急患者への対応など不慣れな事ばかりで、患者さんを不快にさせたり、指導医や看護師の方々などに迷惑をかけたりしています。あまりの自分の腑甲斐無さに落ち込んでしまうこともありますが、医者として、また一人の人間として患者さんに向き合えるように頑張っています。

先日、初めて受け持った患者さんが退院されていきました。治癒というわけではなかったのですが、見送りの際の「ありがとう。」という言葉や聞くと、少しは患者さんの役に立つことができたんだという嬉しい気持ちになりました。それと同時に医療従事者としてのやりがいを感じることもできた気がします。

今年度よりの新しい研修制度の元、今までのような入局という形ではないですが、指導医、指導助手の先生をはじめ、多くの先生方に丁寧に指導してもらいながら、また同期の研修医と切磋琢磨しながら日々研修に励んでいます。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

卒後臨床研修センター 丹尾 幸樹
(金沢大学卒)

研修医生活が始まってはや二ヶ月が過ぎました。



国家試験合格発表があったのが二ヶ月前と思うと「まだ二ヶ月しか経っていないのか」と驚き、また一方では前期内科研修が終了しようとしていることを考えると「もう二ヶ月が過ぎたのか」と気が急いできます。寒空の下、医師国家試験を受けに行った日がいよいよ前のような気がします。それも思えば三ヶ月前。光陰矢のごとしという言葉や、嘸みしめる毎日です。

病院内のロケーションすら把握できなかった研修初日に比べれば、少しは成長できたでしょうか。カルテの行方を捜してむやみやたらに階段を往復したあげく足を挫いたことや、手を震わせながら採血して患者さんに「あんまり緊張せん」と言われてしまったことを筆頭に、この二ヶ月は穴を掘って隠れたくなるような記憶が山積みです。失敗の数々を列挙したら紙面がいくらあっても足りません。正直、研修医を名乗ることすらおこがましいと落ち込んだ日もありました。それでもなんとか研修を続けてこれたのだなあとあらためて二ヶ月を振り返るにつけ、こんな頼りない研修医を指導して下さる先生方、コメディカルの方々、そして患者様方への感謝の気持ちにたえません。そしてまた、この先も周囲の方々にご迷惑をかけるのではないかと考えると、ただでさえおぼつかない足取りがますますふらつきそうな気がします。ですが道のりはまだまだ長いのですから、ここは覚悟を決めて全力で研修に臨んでいくしかありません。いつかは臆することなく自らの職業を医師と呼べる日が来るのでしょうか。研修終了のあかつきには、この原稿の内容すらも笑って振り返ることができるようにと祈りつつ、筆をおきます。

卒後臨床研修センター 渡邊 慎
(福井医科大学卒)

編集・発行：金沢大学医学部附属病院 Kindai Hospital Today編集委員会（事務担当 病院部総務管理課総務係）
TEL 076-265-2057 FAX 076-234-4320 E-mail hpsomu@ad.kanazawa-u.ac.jp
～読者の皆様からのおたよりをお待ちしております～

